

見た目で他者を判断する愚かさ

井熊 大輔

皆さんは精神の障がいや病氣のことについて知っていますか？私は体調を崩して心の病氣になり、現在に至るまで治療を続けています。精神の障がい者手帳も持っています。

何度も体調を崩して精神科に入退院を繰り返しました。十年もかけて体調の良い時と悪い時の波を繰り返し、少しずつ回復してきましたが、体調が悪い時もあります。その時は気分が重く、体もやつと動けるくらいです。

精神の障がいを抱えている人は、心身がとても苦しいと感じていても、他者から見ればそんな風には見えないことが多くあります。そのためか、他者からの誤解に傷ついたり、偏見や差別を受けたりすることがあります。

私にもそのような体験がありました。それは四年前のことです。私はその時、障がい基礎年金二級を受給するため申請をしていました。ある日、年金機構の方が家に来られて、

「国民年金が未納です。学生免除でしたがすぐに支払いをして下さい。」

と言われました。私は「今、障がい基礎年金二級を申請しています。結果が出るまで待つて頂けませんか？」と返すと、「でもあなたは見た感じ三級ですよね。」と言われました。これは申請しても年金支給にはならない、だから国民年金を早く払ってください、という意味でした。

主治医や家族とも話し合い、自分の今後も含めて考えた結果での年金申請だったのに、無駄だといわれた気がして、その時の傷ついた気持ちは今でも覚えています。

その後、障がい基礎年金二級の受給が決定し、手帳も交付されましたが、私の頭の中は常に障がいについての問いがありました。

「見た感じ三級ですよね」。その言葉がよく脳裏をよぎります。自分の病氣や障がいの状態を、他者に見た目で判断された私の心は傷ついていました。当時から「生きづらさ」

を感じていたので、そこから私は「障がいを抱えながら生きること」の模索を始めます。

ところが自分が無意識のうちに他者に偏見や差別をする立場になることもあります。

それは私の障がい基礎年金二級の受給が決まったほぼ同時期のことです。私は精神科のデイケアに通所していました。そこで色々な利用者の方と活動をして一日を過ごします。

ある時、ふと私は「自分の障がいや病気を他者と比べていた」ことに気付きます。他者と自分の症状を比べては「自分はまだまだ大丈夫」と安心してしまっていたのです。

しかしあの時の年金機構の方と、その時私は同じ立場に立っていました。他者の障がいや病気を見た目で判断してしまい、無意識のうちに偏見や差別の心で接していたのです。

誰もが自分を他者と比べたり、見た目で判断したりすることがあると思います。それによって人は比べたり比べられたりする、真逆の立場に立ちます。ところが自分が他者に比べられると、自分の優位性を保つために立場が下の人を見つけて比べ、心の安定を図る傾向にあるのではないのでしょうか。そこから差別や偏見の心が生まれるのだと思います。

よく人権啓発運動などで、「差別をなくそう!」といっ

たキャッチフレーズを耳にします。確かにそれはそれで良いとは思いますが、差別や偏見というものはどこか遠くの間所で起こっている出来事で、自分達とはあまり関係性が無いという感覚になります。

「見た感じ三級ですよね。」と私は他者から見た目で判断される立場にも、デイケアで無意識のうちに他者の症状を見た目で自分と比べて判断し、安心してしまふ立場にもなりました。無意識のうちに全く真逆の立場になることの恐ろしさをこの時知ったのです。それが差別問題へと変化していくと思います。

よって差別や偏見は決して遠い場所の出来事ではなく私達の身近な所、言い換えれば私達の心の中に常にあると思うのです。

自分の優位性を保つために、無意識に他人を見下してしまふ自分の弱さと対峙する勇氣と強さを持ちたいと切実に思います。

また私が日々の生活を送る中で、ある疑問が湧いてきました。それは「障がい者手帳」が必要な社会とは一体どのような社会なのだろうかという疑問です。これは私に手帳が交付されてから湧いてきた疑問です。

日々の生活で手帳を表示することで、家賃などの公共料金の減免、お店の料金や交通機関の運賃が割引になることがあります。しかしそれはあくまでも一つの側面です。

手帳を持つことは本人に取って大きなことです。なぜなら自分の障がいを受け入れることだからです。ところが精神障がいの場合は手帳の交付を拒む人もいるそうです。手帳を持っていることを明かさずに一般就労に行く人もいれば、手帳を持っていることを明かして、就労支援事業所での訓練・勤務を経て障がい者雇用での就労を目指す人もいます。

手帳は決して割引クーポン券ではありません。それが無いと周囲に理解してもらえない生きづらさがそこにはあります。

精神障がいは目に見えないものが多いと思います。その人の特性による物理的な生きづらさよりも、社会的な生きづらさが大きいように私は感じます。この社会的な生きづらさを障がいの有無に関係なく、全ての人がしっかりと直視していく必要があると思います。

生きづらさは人それぞれなので難しい問題ですが、手帳が多数派の人達の社会を生きるうえで必要な、ある意味でパスポートの役割を持つことは否めないと思います。

もっと色々な人がいて、多様に富んだ社会であって欲しいと思います。そこでは意見の違いもあるでしょう。しかしそこから、お互いを包摂することが大切ではないかと思っております。自分との違いに差別や偏見の心を持つことを認め、そこから違いを受け入れることが良い社会になって

いくと思います。

その時に障がい者だけでなく、全ての人にとって生きやすい社会になると思います。多様性を受け入れることは他者も自分も受け入れることです。これからも自分自身をよく見つめ、研鑽を重ねて生きていきたいと思えます。

◇心の輪を広げる体験作文◇

フィルターさきの先みに見えるもの野原の 基世美はら

「Sちゃんは神様の子なんだよ。だから、みんな、仲良くしようね」

と、小学生の時に先生から言われた。Sちゃんは重度の知的障害があり、つばを吐きかけたり引つ掻いたりするので苦手だった。でも、神様の子だから何をしても許してあげなければならぬと子どもながらに思ったものだ。

大人になり、支援学校の保健室で勤務していた時に、「Sちゃんは神様の子」という表現に違和感を抱いた。生徒達は、障害があっても、健常児と何ら変わらなく思えたからだ。問題行動のある生徒もいたが、その多くに理由があり、それに応じた配慮をすることで落ち着くことが多かった。情感豊かに喜怒哀楽を表現し、厳しい先生の前では大人しく、優しい先生には我儘を言うところなど、人間らしさ満載だ。十六年の時を経て、Sちゃんは神様の子ではなく、私達と何も変わらない人間の子なんだなあとしみじみ思った。

支援学校では、学校外で学ぶ機会がたくさんあり、海やプール、スケート場など、様々なところに出掛けた。多くの校外学習に養護教諭は引率したが、私も生徒達からたくさんのお話を学ばせてもらった。

校外学習に行くバスの中の出来事を、今でも鮮明に思い出す。私の隣の席は、重度の知的障害があるAちゃんだった。Aちゃんは会話ができないが、

「あーあー」

と喃語のような言葉で感情を伝えてくれた。その日、私はバスに酔ってしまい、念の為持ってきていた瓶入りの酔い止め薬を飲もうとした。すると、Aちゃんが私も飲みたいと言わんばかりに、横から瓶を掴んできたのだ。

「ごめんね。Aちゃん、コレ、ジュースじゃなくてお薬なの。先生、気持ちが悪くて、お薬を飲まないと言きそうなの」

と必死に説明した。でも内心では、Aちゃんが分かってく

れるとは思えず、吐き気を堪えながらどうしたものかと困り果てていた。そんな私の様子を、Aちゃんはきよとんとした表情で見えていたが、少しして瓶から手を離れたので、その隙に慌てて薬を飲み干した。すると、驚いたことにAちゃんは、

「あーあー」

と言いながら、私の頭を何度も何度も、撫でてくれたのだ。その後もずっと、私の頭を撫でてくれたAちゃん。大丈夫？早く良くなるといいねというAちゃんの心の声が聞こえてくるようだった。

私は、私の言葉が伝わったことや、Aちゃんが優しい反応を返してくれたことに驚き、喜びに胸が熱くなった。しかし同時に、重度の知的障害のあるAちゃんには伝わらないと思いついて、自分で自分に気付き、愕然とした。それまで、重い障害がある生徒に対し、何も分からない赤ちゃんに接するように対応していたように思う。無意識に「障害児」というフィルター越しに彼らを見て接していたことについて、猛省した。もともともと、濁りのない目で見なければと強く思った。

軽度の知的障害の生徒は、障害を受容できず苦しんでいた子が何人もいた。

「なんで私ばかりこんな病気になるの？私もみんなみたいに普通になりたかった」

と泣きながら叫んだNさんの声は、今も胸に残っている。泣き続けるNさんに、私はかける言葉が見つからなかった。何故なら当時、私自身に筋疾患の症状が出現し始め、落ち込む日々だったからだ。Nさんの言葉が、まるで自身心の声のように感じた。

病気で退職した後、出産を機に病状が進行し、今は私も障害者の仲間入りをした。無理をすると悪化するため、ヘルパーさんに家事を手伝ってもらいながら生活している。外出時は杖を使い無理をしないようにしているが、調子が悪くなると呼吸や嚥下が難しくなる。特に、自分の身体が思うように動かない時は、健康だった頃に戻りたいと無性に思う。発病後、一番辛かったのは、我が子が望むことをしてやれなかったことだ。抱っこ、たかいたかい、追いかけて、運動会の親子競技など筋力を使い続ける動作が出来ず、子どもには数え切れないほど我慢をさせてきた。

「病気のママは嫌や。元気なママが良かった」
という娘の言葉は、未だに忘れられない。

中学生になった娘に、母親が障害者であることをどう思うか聞いてみた。すると、

「お母さんが障害者だと思ったことがない」

と言う。おそらくこの世で一番、障害者らしい私を見てるのは娘だ。対外的には心配をかけないように、持てる筋力全てを使って元気そうに振る舞うが、家で家族だけにな

ると、グツタリ寝込むのが私の日常だ。頭が疑問でいっぱいになった私に娘は言う。

「動けない姿のお母さんもお母さんだから。障害者じゃなく、お母さんと思えない」私が「障害者」のフィルターを通して生徒を見ていたのとは違い、娘は私自身を見てくれている。障害は私の一部でしかなく、娘にとってはどんな私も「お母さん」なのだ。

この先、病状が悪化したらと無性に不安になる。でも、不安を口にすると、娘が、

「もし寝たきりになっても、お母さんは存在してくれてくれるだけでいいんだよ」

と言ってくれる。身体の辛さは変わらないし、先の不安はなくならない。でも、動ける私も動けない私も、私として認めてくれている家族の存在が、私の生を後押ししてくれている。

健常者として障害児と関わっていた時も、障害者になつてからも、私は周りの方々から多くのことを学んだ。人は、同じ境遇の人とは共感を、違う境遇の人からは気付きを得るのではないだろうか。健常者、障害者と線引きをすることなく、どんな人に対しても一人の人間として誠実に向き合うことで、人生がより豊かになるのだと思う。障害者であり母や妻でもある私の人生が少しでも豊かになるように、これからも精一杯生きていきたい。

◇心の輪を広げる体験作文◇

共生社会の実現のためには連帯行動こそ必要

原田 勉

私の左耳は難聴である。特に高音の領域が聞きづらい状態にある。父親も難聴により身体障害者手帳の交付を受けており、私も今後の加齢により、周囲とのコミュニケーションに支障を来すことになるのではないかと危惧している。

他方、今日、新型コロナウイルスの感染拡大により、歌手の皆さんは入場者数を大幅に制限するとともに、感染防止対策をしっかりと講じなければコンサートを開催することができない状況にある。

私は医学的に聴覚の障害により歌唱や音楽をよく聞くことができず、他方、歌手の皆さんは、社会的な制約から歌唱や音楽を披露することができず、いわば私も歌手の皆さんも日常生活や社会活動に支障を来しているという共通の状態にあると言えることができる。

このように日常生活や社会活動に係る支障は、本人の心身の障害だけでなく、生活や活動をしくくしている世間の意識や社会の仕組み、制度にも起因しており、今日、

障害は社会的モデルとして認識されつつある。

さて、今日の新型コロナウイルスの感染状況を見ると、これまで人々の生活や活動を支えていた多様なサービスは総じて低下・縮小・喪失する事態となっている。そして、これまで当然に享受できると考えていた平穏な暮らしに、何らかの制約や支障が生じることになったという点で、障害の有無に関わらず全ての国民は、少なからず社会的に「障害者化」したことを認識する必要があるのではないかと考える。

社会に制約や制限が生まれ、行動が不自由になると、人々の日々の生活に心の余裕がなくなり、自分の生活の維持で手一杯となり、結果、寛容性が失われることになる。例えば、困っている人を見ても、見て見ぬ振りをしたり、あるいは、簡単に手助けできるのに、あえて手助けしようと思わず、障害のある方々を始めとした社会的弱者の方々には暮らしにくい、孤立、分断、差別、排除が生まれることになる。

現在、多くの都道府県や市区町村において、障害のある方々を支えるヘルプマーク・ヘルプカードの普及促進や多彩なあいサポート運動が展開されている。しかし、前述のような社会状況になると、障害のある方々は、周囲に支援や援助を求めにくくなり、精神的にも実態的にも抑圧的な差別感にさいなまれる暮らしにくい地域社会となる。このことは、太平洋戦時下、障害のある方々は、障害のために兵隊として戦場にも行けず、また、銃後の守りとして社会に協力、貢献もできない存在として、世間から白眼視され、理不尽な差別を受けた歴史が証明している。

一方、現在では、新型コロナウイルスの感染を巡り、医療従事者やクラスターが発生した施設、学校・生徒に対する偏見的な誹謗・中傷や、飲食店等への正義の名を借りた脅迫めいた張り紙、都会から田舎への帰省を非難する張り紙など、全国各地で社会に差別と分断をもたらす心無い言動が行われている。

そして、こういった誰でも「障害者化」してしまう可能性がある社会環境にあつて、コロナ禍を背景とした差別を助長する動きが見られる現状を克服するため、私は、自己中心的な孤立、分断、差別、排除をもたらすような行動は否定され、お互いに手を携えて支え合う社会的な連帯行動こそがとるべき行動ではないかと考える。

フランス領アルジェリアの港町でペストが発生し、街が

封鎖される中で、疫病蔓延という不条理にあらがう市民の姿を描いたカミュの小説「ペスト」では、感染初期には樂觀的に行動していた市民が、感染が拡大すると、感染の恐怖に怯えながらも自ら保健隊を組織し、患者の汚物や死体の処理を行うなど、社会的な連帯行動をとるに至っている。

現在の新型コロナウイルスの感染動向を踏まえると、この小説で描かれている市民の行動は、極めて示唆に富むものと言え、実際、我が国では医療機関へのマスクや防護服の寄附活動、毎週金曜日に一斉に拍手を送るフライデーベーション、感染流行地域への看護師の派遣、介護施設で患者が発生した場合の施設間の応援体制の確保といったことが全国各地で取り組まれている。

厳しい状況下であるからこそ、障害のある方々が暮らしやすい多様性のある共生社会の実現のため、お互いの人格と個性を尊重し合うだけでなく、個人、家族、団体、施設・事業所、地域、自治体等のあらゆるレベルで手を携えてお互いに助け合う連帯の行動を取ると考える。そのためには、まず、常に障害のある方々に寄り添い、相手の立場に自分を置き換えて思考、行動できる力と研ぎ澄まされた人権感覚を身に付けることが不可欠である。そして、こういった人々の輪が、徐々に地域に広がることによって、社会のあり様を構造的に変えていくことになることを確信

している。

近年、地震、津波、風水害、原発事故など、私たちの生存を脅かす予想を超えた不条理なことが頻発し、障害のある方々はその都度苦難な状況に置かれている。新型コロナウイルスの感染拡大に伴う「障害者化」現象にあつて、これまで経済的合理性を追求する生き方を見直すとともに、社会的な不条理への対応として、どのような行動を取ればよいのか、今日、誰も落ちこぼれることなく社会全体が一步発展するための人間の新たな可能性が問われているように思う。

また、来年は、延期された東京パラリンピックが開催される。これを一過性のイベントに終わらせることなく、万人がお互いに助け合い連帯して生きるとはどういうことか、これまでの私たちの精神構造を変革し、行動変容をもたらしものにしなくてはならない。これこそが、後世に継承すべきパラリンピックのレガシーと考える。

◇心の輪を広げる体験作文◇

共に生きる^{とも} ^い

もんざわ
門澤

さなえ
早苗

私は、私立の保育園に勤めている保育士である。わが園は、今年度から幼児クラスを《学年わり》から《たてわり》に変更した。まだおむつをしている3歳から、しっかりと者の6歳までが同じ保育室で過ごす。わが園では、その集まりを《ファミリー》と呼ぶ。

一日中夢中になってブロックで虫を作っている男の子や、5歳児に負けじと、何でも「私もできる。やりたい!」と言っている3歳の子、今流行っているダンスを所かまわず踊っている子など、个性的な子どもたちの集まりで、毎日が刺激的でとても楽しい。ファミリーの中には、知的障がいや発達障がいを持つ子どもたちが約25%の割合で在籍している。見た目では、通常発達の子どもと何ら変わりはない。特性としては、集団活動が苦手であったり、コミュニケーションがうまく取れなかったり、感覚が人より過敏であったり、衝動が自分で抑えられなかったりする。一人ひとりの個性として受け止められれば問題は無いのだが、

子どもばかりの集団生活となると、それはあつという間にトラブルへと発展してしまうのだ。

発達障がいを持つA君は、人懐っこく、よく笑いよく喋ることがとても難しい。ファミリーでは、一人一人の宝箱があつて、自分が作った物はその箱に入れて置いておいたり、棚に飾ったりしている。その宝箱の中は、大切なものが入っているの、友達の物は触ったり勝手に持つて行ったりしてはいけないことになっている。しかし、A君にとつてその約束を守ることは難しい。所有者が誰であつても、目に入って興味があくと触らずにはいられない。咎められると「自分が見つけた。取つてない」と主張する。下手に攻撃するとパニックに陥つて、手に持っている友達が、一生懸命に作った作品をバンと床に叩きつけてしまい、友達にも保育士にもくつてかかる。何とか落ち着かせて、A君の気持ちを丁寧に引き出していく。「かっこいい物見つけ

た」「欲しい」「作りたいけど作られへん」。A君の思いが、保育士には伝わってくる。聞く耳を持ち始めたA君に「でも勝手に持って行っていいの？」と尋ねると、「あかん」と苦しうに答える。「壊してしまったねえ」「作った友達、悲しいよ」と、友達の気持ちを代弁して繰り返し伝えていく。どうしたらいいのかをK君と一緒に考えていく。「友達のおもちゃを触りたい時、どうする？」と尋ねると、「貸してって言おう」「そうやね。いいよって言って貰ってから触るねんよ」と、トラブルの度に、関わり方や伝え方を丁寧に伝える。

保育士に教えてもらった通り、A君は「貸して」と言ってみた。しかし、繰り返し自分が作った物を壊され続けている子どもたちは、そう簡単に自分の作った物をA君に貸してはくれない。にべもなく「あかん」と断られてしまう。A君はつかつかとなってしまい、あつという間に友達の作品を床に叩きつけてしまう。壊されてしまった友達は、驚きと悲しみ、A君への怒りで、泣き叫んだりA君に殴りかかったりする。A君は、怒られた原因が、自分が友達の玩具を壊したからだという事に気が付かない。保育士は一日に何度も何度もA君と友達のトラブルを仲裁することに奔走する。天を仰ぐことも、言葉を失うことも数知れず。A君が悪いわけではない。衝動が抑えられず、思いのやり取りがうまくできないのだから、今はその練習をしている期

間だと保育士自身も自分に言い聞かせる日々が続く。A君への関わり方やファミリーの運営を試行錯誤して、気が付けば7月……。少しずつ、子どもたちの関係性が変わってきたように感じ始める。トラブルが無くなったわけではない。しかし、トラブルへと発展しない場面が増えてきた。よくよく観察していると、周りの子どもたちの言葉が変わってきている。

まず、頭ごなしに「やめて」と、強い口調で言う事が少なくなってきた。「何？何がしたいん？」とA君に尋ね、K君の意向を聞き、融通できる物を代わりに渡し、「だからこれは触らんといてな」と、交渉している。また、別の子どもは、A君に「これが欲しいん？」と自分から尋ねて「欲しいんやったら、これあげるわ」と言って、予め自分が二つ作っておいた一つをA君に渡しているのである。優しくされ、もらった玩具を持つてにこにこしているA君の様子に満足していると共に、自分の作品を持つていかれない安心感をもって、再び自分の遊びに向かっているのだ。

子どもたちは何度も何度もA君とのトラブルを経験し、自分の大切な物を壊されないために自分なりに考え、一緒に過ごしていくための方法をあの手この手で考えて実践し始めている。そんな姿を垣間見て、私は毎日やってきたことが間違っていないかあったのかなあと、少しホッとしたり。

幼児期は、人としての力を育てる黄金期だと思ってい

る。子どもの世界はみな平等で、障がいの有無で判断したり、一方が我慢したり強制されたりするのではなく、一人の人としてお互いが真正面からぶつかり合う。思いつきり喧嘩して傷つけ合い、わんわん泣いては体をいっぱい使って消化する。そして学んでいく。いっぱい喧嘩して、いっぱい泣いて、いっぱい考えて欲しい。そうすれば少しずつ少しずつ、人と関わる力の根っこが太くなる。自分のことと人のことを大切にする礎になる。とはいえ、まだまだ保育士の仲裁や仲立ちが必要だ。ファミリーになって5か月。もつとぶつかり合って関係が深まっていくんだろう、どんな風に育ってくれるんだろうと、少し楽しみな夏でもある。

◇心の輪を広げる体験作文◇

交換日記
こうかんにっき渡辺
わたなべ伯加
のりか

私には、精神障害と、知的障害があります。その事を知ったのは、今から17年前に仙台に来てからの事でした。生まれて育った所は、広島県の福山と言う町です。私は、小学校一年生から、中学一年の二期期まで、特殊学級に入っていました。中学一年生の二期期から普通学級に戻りましたが、すぐにイジメの対象になりました。私は耐えられなくなるかと職員室の教頭先生の所に行きました。先生は、「伯加さん、どうしましたか？」

と私に尋ね、話を聞いて下さいました。ある時、私が父と母の仲の悪さを話すと、両親そろって学校に呼ばれ教頭先生に

「お子さん達の前でケンカはしないと私に約束して下さい」

と言われる事もありました。

そんなある日、放課後、色々あり学校がいやになり、学校で教頭先生が声をかけて下さったのに気付かず帰って

いました。すると帰り道の途中で

「伯加さん」

と私を呼ぶ教頭先生の声が聞こえたのです。私がふり返ると教頭先生はバイクに乗り、私をおいかけて下さっていました。私が

「教頭先生、どうしたんですか？」

と言うと、先生は、

「学校で声をかけても風を切るように去って行ってしまったので心配になり追いかけて来ました。大丈夫ですか？」

と言うのです。私は、

（この先生なら信用できる）

と思い、

（もう一度、学校へ行ってみよう）

と思うようになりました。

次の日学校に行くと、教頭先生が職員室前で私を待つて

いて、一冊のノートを私に見せて、

「これから、このノートを使って、二人で交換日記をしましょう。何でも好きな事を書いてOKですよ」

と言って手渡して下さいました。それから一年近く二人でノートを交換しました。私は主に、学校でのいじめの事や一日に起きた出来事を書き、先生はそれにコメントして下さったり、ご自分の事を書いて下さったりしました。

そして私が中学三年になった時、教頭先生が新しい学校へ転勤される事になり、私が生徒代表でお別れの言葉を読む事になりました。式が行なわれる日まで担任の先生を前にして、何度も読む練習をしました。そして当日、私は見事に読む事が出来ました。交換日記を二人でした事、そしてその中行なっていた、「一日何でもいいので一つ良かった事を探す事」などをしました。そして式は無事に終わり、私は家に帰りました。

その日の夕方、教頭先生は我が家にお礼を言いに来て下さいました。私は教頭先生に、「今までありがとうございます。新しい所に行かれても頑張ってください。」

と言うと先生が

「ありがとう伯加さん、あなたの優しい心をいつまでも忘れない様にして下さいね。」

と、おっしゃいました。

あの教頭先生が居なければ今の私もここに居ないでしょう。

う。これが、私と教頭先生との思い出の出来事です。